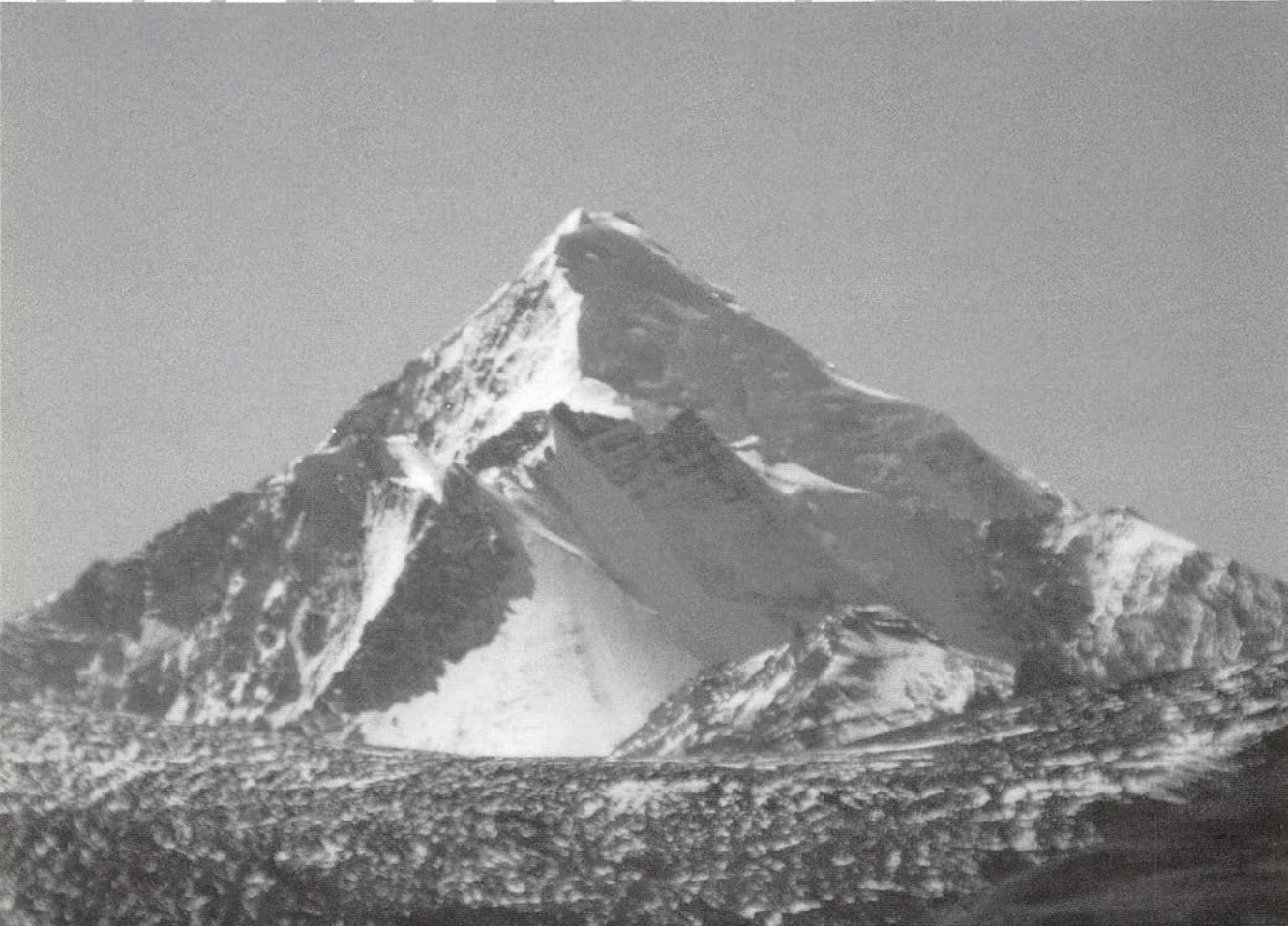


HIMALAYA

ヒマラヤ

No. 344



2000 JULY



日本ヒマラヤ協会
THE HIMALAYAN ASSOCIATION OF JAPAN — HAJ

2001年H A J 登山隊隊員募集

中、ネ国境 ヤンラ・カンリ (7,429m)

ガネッシュ・ヒマールと言う名で日本人には馴染み深い山群の主峰がヤンラ・カンリである。

1955年10月24日、スイスの著名な登山家のレイモン・ランベール (41) と、フランスの女流登山家のクロード・コーガン (29) ら3人によって、ネパール側のサンジュン氷河から初登頂された。

60年5月31日、イギリスのP.J.ワレイスとギャルツェン、ノルブ2人のシェルパが主峰の東にあるドームに登頂したが、主峰は断念している。

いまだに第2登を許していないが、今回の計画は、中国領の北面から登頂を目指すもの。北面は1998年のH A J隊がカバン峰の帰途偵察隊として初めて入山し、登路を探った。手つかずの新鮮な山であり、静かな山行が楽しめる。

意欲ある岳人の応募を期待します。

記

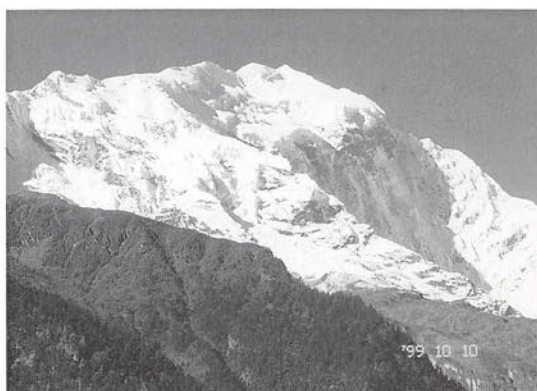
1.期間 2001年9月10日～11月8日 (60日間)

2.募集人員 10名程度

3.負担金 100万円

4.資格 冬山の稜線を20kg程度の荷物を持って行動できる登山経験のあること。協調性があること。未知の山に挑むリスクを認識できること。

5.申し込み〆切 2000年6月30日



▲ヤンラ・カンリ北面。中央左上から右下の稜を予定

表紙写真

チベット、ナムナニ (7,694m) の西面は、広大な谷間となっている。秋深い10月下旬、北西面に設けられたBCから朝な夕なにインド国境に聳えるピラミダルな無名峰を見ながら至福の時を過ごした。

(文・写真: 山森 欣一)

ヒマラヤ No. 344

- | | |
|-------------------------------------------|--------------|
| 1. PEOPLE | Pit Schubert |
| 2. 転換期にあるヒマラヤ登山 | 山森 欣一 |
| 4. ネパール、クーンブ出身者のエヴェレストと登頂死亡 | |
| 6. ヒマラヤ・ジデタル通信 2000年春・ネパール速報 | |
| 11. ヒマラヤ・ニュース <地域ニュース・トピックス・BOOKS・ヒマラヤから> | |
| 13. 高山病の実態 | |
| 16. ヒマラヤ登山 日本人死亡者 | 山森 欣一 |
| 24. 寸感・事務局日誌 | |

PEOPLE

3年前に山と渓谷社から「生と死の分岐点」という興味深い本が刊行された。山での事故例を写真や図を多用して紹介し、事故防止を訴えた。解説が的を得ていて分かりやすく、読み物としても面白い画期的な事故防止の啓蒙書であった。

その著者であるピット・シューベルト氏(64)が日本勤労者山岳連盟の招きで夫人同伴で来日され、5月14日東京で「世界の山遭難防止に知力を尽くして」と題する講演会を行い大好評を博した。その模様については、他でも紹介されるので、ここでは氏のヒマラヤでの活躍の一端を紹介する。

ネパール・ヒマラヤが再開された1969年春、ドイツ隊はアンナプルナ I 峰を南面モディ・コーラから長い稜線を越えて登る計画で入山した。L.グライスル隊長率いる8人のメンバーに氏も加わっていた。5月9日には氏とウィンクラーの2人が稜線上にあるロック・ノアール(7,485m)の初登頂に成功した。しかし、その後悪天に陥まり再び他の2人がロック・ノアールに登頂したもののアンナプルナ I 峰の3つの頂のある稜線に達することなく敗退した。(AA J 1970)

76年春、氏は6人のメンバーを率いて再びアンナプルナにやって来た。今度の目標は、IV峰の南壁であった。南壁は危険であった。初期の雪崩のため意見が分かれ、結局登攀は氏とH.バウマンの2人によって行われた。しかし登攀は困難を極めた。6,720mに作られたC6からの頂上攻撃の第1回目で氏は雪崩に遭い、かろうじて掘り出された。第2回目では前衛峰を越えたものの風雪のため敗退。第3回目既に食糧は尽きていた。7,170mでビバークしたが2人は寝袋も持っていない、バウマンは羽毛服さえなかった。翌5月18日午後1時半遂に2人は寒気厳しく強風の頂上(7,525m)の頂上に立った。しかし、氏らの本当の困難はここから始まった。困難な下降を続けて21日にBCに着いた氏らを待っていたのは、もぬけの殻のキャンプ跡だけであった。氏らが着く5時間前にキャラバンはスタートしていたのだ。氏の足は凍傷に



やられていた。(切り取られた氏の指は、14日の講演会のスライドで紹介された。今でも大切に保管されている。)

この登攀を「山岳年鑑'77」は、「数々の幸運に助けられたとはいえ、この登攀は、ヘルマン・ブールのナンガ・パルバットにおける有名な単独行に匹敵するものといえよう。」と最大の賛辞を捧げている。

ドイツ山岳会は、会員数62万人。山を目指す老若男女のほとんどが加入し終生会員を止めないらしい。氏は1977年以来このドイツ山岳会の安全対策委員会で事故分析、事故予防、用具検査を受け持っている。ドイツ人として1964年初めてアイガー、マッターホルン、グランドジョラスの北壁を完登した生粋のアルピニストである。しかし、氏をこの分野に駆り立てたものの一つに、前述のアンナプルナでの体験が重要な位置を占めていることは間違いないだろう。

氏は来日にあたって次のようなメッセージを寄せている。

「登山とロッククライミングというスポーツは、同時に身体と生命に関わる危険をとまいません。それらの危険を避けるためには、目的にかなった優れた装備と広範な教育が必要です。健康と生命は、どのようなスポーツをする場合にも、かけがえない財産でありますから、それをどんなに大切にしても、し過ぎることはないのです。

転換期にあるヒマラヤ登山

—— 高所登山と高所遠足 ——

山森 欣一

2000年5月17日午後2時半H A J ルームの電話が鳴った。相手は朝日新聞の近藤記者であった。チョモランマの通常ルートである北稜からの登頂を目指していた法政大学隊の松本伸夫(34)、ロゼンバウム隊員と高所協力員(以下H A Pと略)総勢4名が13時21分登頂に成功したとのことであった。ことの是非は別にして、遙か離れた世界最高峰登山の様子が瞬時に分かる時代になった。

この日は、13時35分に北海道山岳連盟隊の江崎幸一(48)、工藤寛(33)、高橋留智亜(34)、14時15分には東北海外登山研究会隊の八嶋寛(50)、保坂昭憲(52)、児玉隆司(43)も登頂した。

そして翌日18日には法大隊の荻尾雄二(27)が登頂、19日には、東北隊の田中敏雄(44)、小林重一(45)、今野一也(61)、法大隊の山本俊雄(63)、東北隊に入っていた山下健夫(51)も登頂し、この時点で山本は、エヴェレスト登頂者の世界高齢記録を塗り替え、結局、今春、中国側から世界最高峰に日本人は13名登頂者が出たことになる。(東北隊7名、法大隊3名=日本人だけ=、北海道隊3名)

その中には私の初遠征75年ヌンと81年カンチェンジュンガを共にした保坂、81年カンチの仲間八嶋、82年クンの仲間である今野ら親しい岳友も含まれている。彼等の奮闘を称えて拍手を送りたいところであるが、手放しでは喜べない事情がある。

昨今の通常シーズンの通常ルートからのエヴェレスト登山は、南北を問わず「高所遠足」化しているからだ。

高所遠足とは、B C上のルート工作或やキャンプの設営・維持、荷物の運搬をH A P任せにする登山のことである。(岳人633号・2000/3月号P89

参照)

90年代に入ってエヴェレストは、欧米のアルパイン・ガイドら営利会社が主催する国際公募隊によってオーバーユーズの状態が定着した。これらの国際公募隊に一定の費用を支払って参加する登山者は、前述したようにルート工作も荷物の運搬もキャンプの維持にもタッチせず、専ら自らの体調維持に努め、雇用したガイドやH A Pによって設置された固定ロープを辿り、キャンプに泊まり登頂を目指すのである。

隊員自らがルートを開かないことを前提とする登山は、「登山」というよりは、「遠足」となると変わらないと言って過言ではないと思うが諸兄の意見は如何？

このようなオーバーユーズや高所遠足化現象の端緒は、ヨーロッパの高名な登山者達が80年代初頭から始めた、「公募登山」隊の急激な進展によってもたらされたのである。

その経緯は既に「山と溪谷739号(97年/2号)」にて解説した。営利を目的にした公募隊は、高い山に登りたいと願う層に急速に浸透した。加えて不思議な事にどこの誰の知恵か、96年春のシーズンからネパール政府は、サガルマータの登山料を改定し、通常ルートであるサウスコル経由の南東稜ルートについては、7万USドルと法外な金額を設定したため、自らの登山を展開しようとする一般の登山隊は、登山料5千USドルの中国側に締め出される結果となった。そのため、北面の中国側に登山隊が集中することとなり、公募登山隊の隆盛に拍車をかける結果となった。

それを裏付けるように今春中国側の日本隊から

の情報では、BCでも正確な数は把握できないが25~30隊、160~270人が入山していると言う。そして後から入山した登山隊は、先にルートを開き固定ロープを設置した公募隊らに固定ロープ使用料を一人当たり100USD請求されるという。さらに追い討ちをかけるように、ノースコル（標高約7000m）では遅く行った隊は、テントを張る場所も無いほど混雑していると言う。蛇足であるが、エヴェレストばかりではなく、人気の高い八千メートル峰やプロ・リ、アマ・ダブラムなどでは、上部テント、テント内の食糧や酸素を無断で勝手に使用されるケースが沢山報告されている。

このような実態を承知してHAPを同伴して前述したような峰に入山する登山隊もまた「高所遠足」しか実践できないことは自明のことであろう。そしてこのような「高所遠足」化が、他の八千メートル峰でも現れつつあり、かつ、その年齢層も高齢者ばかりではなく、若年層にも広がりつつあるのである。

このような高所遠足の顕著な特徴は、参加する登山者の高所登山履歴が少ないことである。この傾向は、今後急激に一層進むであろう。極端に言えば、登山経験の無い人が、高所順応のために五~六千メートル級の山を登った後、エヴェレストに登頂する日がそう遅くない時期に実現するだろう。

今後、ヒマラヤ登山の記録を整理するに当たっては、「高所登山」と「高所遠足」のジャンルを区別する必要があると考える。

さて、JAC会報64号（昭和12年2月号）に、浦松佐美太郎が以下のような文章を書いている。

＝英国山岳会のロングスタッフ氏から数日前に、長い手紙を受けとった。（中略）ロングスタッフは、ヒマラヤの登山について、自分の思ふ所を述べてゐる。日本の山岳界にも役に立つことが多かろうと思ひ、此處に訳出さして貰ふこととする。＝「日本の登山家達が、ヒマラヤに登山するに當り、（筆者注：立教大学隊のナンダ・コット登山のこと）山の高さなどといふことを度外視した態度を示したことは、此の上もなく立派な見識を示したことであり、非常に嬉しいことである。

ヒマラヤには、山として立派な山が数多くある。登山の対象として選ばれるべき、優れた山の数も多い。それ等を顧みもせず、たゞ高さの高い山だけを目掛けて、我も我もとヒマラヤへ出掛ける比頃の風潮は、苦々しくも思はれる。八千メートルの山々へ、大變な数の人夫の群れを引きつれて、まるで競争の様に押しかけてゆく様子は、馬鹿げた登山と言ふ他あるまい。（後略）」

63年前のことである。「高い山」を「エヴェレスト」、「大變な数の人夫」を「HAP」と置き換えれば、全く前述の「高所遠足」のことを指摘していると言える。

例えて言えば、エヴェレスト登山の記録を、20年後、30年後の登山者達が参考にする時、自らルートを開きながら登頂した隊と、全てをHAPらに依存した隊が同様に整理されていたならば、歴史は正しく理解されないだろう。

登山に限らずこれからの時代は、個人記録を中心に整理されて行く。過去の記録も新しい価値観によって見直され、新たなる概念が導入され吟味され整理されて行く時代が到来したと言えよう。

エヴェレスト高令登頂者

	氏名	生年月日	登頂年月日	年/月	国
1	山本 俊雄	1936, 7, 13	2000, 5, 19	63, 10	C
2	今野 一也	1939, 4, 6	2000, 5, 19	61, 1	C
3	川原 慶紀	1940, 11, 19	1998, 5, 20	57, 6	C
4	石川 富康	1936, 11, 22	1994, 5, 13	57, 5	N
5	近藤 和美	1941, 11, 22	1998, 5, 22	56, 6	C
6	保坂 昭憲	1948, 2, 16	2000, 5, 17	52, 3	C
7	山下 健夫	1949, 1, 4	2000, 5, 19	51, 4	C
8	八嶋 寛	1950, 3, 10	2000, 5, 17	50, 2	C
9	江崎 幸一	1952, 3, 26	2000, 5, 17	48, 1	C
10	小野寺 斉	1950, 9, 23	1998, 5, 19	47, 7	C
11	×難波康子	1949, 2, 7	1996, 5, 10	47, 3	N
12	阿久津悦夫	1938, 8, 13	1985, 10, 30	47, 2	N

(注)×=死亡〔国名の略〕C=中国、N=ネパール

■ ネパール、クーンブ出身者のエヴェレスト登頂と死亡 ■

■ 登頂

氏 名	回数
1.Late Chotare Sherpa	1
2.Mr.Ang Tshering Sherpa	1
3.Mr.Chewang Rinzing Sherpa	1
4.Mr.Pemba Noru Sherpa	1
5.Mr.Lakpa Tenzing Sherpa	1
6.Mr.Yong Tenzing Sherpa	1
7.Mr.Ang Phurba Sherpa	1
8.Mr.Pertemba Sherpa	1
9.Late Ang Phu Sherpa	1
10.Mr.Lakpa Tshering Sherpa	1
11.Mr.Pema Dorjee Sherpa	1
12.Mr.Sonam Dendu Sherpa	3
13.Mr.Chuldim Sherpa	2
14.Mr.Tshiring Chumdi	1
15.Late Phu Dorjee Sherpa	2
16.Mr.Nima Tashi	1
17.Mr.Lhakpa Dorjee Sherpa	1
18.Mr.Lopsang Temba Sherpa	1
19.Mr.Ang Temba Sherpa	1
20.Mr.Ang Danu Sherpa	1
21.Mr.Lhakpa Tshiring Sherpa	1
22.Mr.Ang Tshering Sherpa	2
23.Late Ang Lhapa Sherpa	1
24.Late Lhakpa Nuru Sherpa	2
25.Mr.Lhakpa Dorjee Sherpa	1
26.Mr.Lhakpa Sonam Sherpa	2
27.Phinzo Sherpa	1
28.Late Sungdare Sherpa	5
29.Mr.Pemba Dorjee Sherpa	4
30.Mr.Phu Dorjee Sherpa	2
31.Mr.Tashi Tshiring Sherpa	2

氏 名	回数
32.Mr.Ang Pasang Sherpa	3
33.Mr.Pemba Temba Sherpa	1
34.Mr.Ang Dorjee	1
35.Mr.Ang Tshering Sherpa	5
36.Mr.Kami Tshering Sherpa	1
37.Mr.Lhakpa Gyaltzen Sherpa	1
38.Mr.Ang Rita Sherpa	10
39.Mr.Appa Sherpa	10
40.Mr.Chong Nima	7
41.Mr.Dorjee Sherpa	7
42.Mr.Dawa Tshering Sherpa	5
43.Mr.Kami Rita Sherpa	5
44.Mr.Lhakpa Rita Sherpa	3
45.Mr.Lhakpa Rita Sherpa	3
46.Mr.Ang Gyaltzen Sherpa	3
47.Mr.Kersang Namgyal	3
48.Nima Rita Sherpa	3
49.Dawa Temla Sherpa	3
50.Mr.Ang Phurba Sherpa	2
51.Aa Rita Sherpa	2
52.Dawa Nuru Sherpa	2
53.Mingma Tshering Sherpa	1
54.Chowang Dorjay	1
55.Mr.Gyaltzen Sherpa	2
56.Mr Dawa Nuru	1
57.Mr.Tshultin Sherpa	1
58.Mr.Tenzing Nuru Sherpa	1
59.Ang Mingma Sherpa	1
60.Mr.Ang Dorjee Sherpa	2
61.Mr.Agiwa Sherpa	2
62.Mr.Tenzing Sherpa	1

■ 死亡

氏 名	Date of death	Casuse of death
1.Phu Dorje Sherpa	1969 crevasse	Fall in icefall
2.Mingma Norbu Sherpa	1940	icefall collapse
3.Nima Dorji Sherpa	''	''

氏 名	Date of death	Casuse of death
4.Tshering Tarkey Sherpa	"	"
5.Passang Sherpa	"	"
6.Kunga Norbu Sherpa	"	"
7.Kami Tshering Sherpa	"	"
8.Kyak Tshering Sherpa	"	"
9.Zangbu Sherpa	1973	Avalanche
10.Pemba Dorji Sherpa	"	"
11.Nawang Lotuk Sherpa	"	"
12.Sanuwang Gale Sherpa	"	"
13.Lakpa Sherpa	"	"
14.Nima Wangdi Sherpa	"	"
15.Dawa Nuru Sherpa	1978	Fall in crevasse
16.Ang Fu Sherpa	1979	Fall
17.Nawang Kersang Sherpa	1980	Avalanche in icefall
18.Pasang Sona Sherpa	1982	"
19.Ang Chuldim Sherpa	"	"
20.Dawa Dorji Sherpa	"	"
21.Lakpa Tshering Sherpa	1982	Illness
22.Nima Dorje Sherpa	1982	Fall
23.Pasang Temba Sherpa	1983	Fall
24.Ang Pinji Sherpa	1984	Fall
25.Ang Dorje Sherpa	1984	Avalanche in icefall
26.Gelu Sherpa	1986	Icefall collapse
27.Dawa Norbu Sherpa	1986	Avalanche
28.Tshuttin Dorje Sherpa	1987	Fall
29.Lakpa Sonam Sherpa	1988	Cause unknown
30.Pasang Temba Sherpa	1988	"
31.Lakpa Dorje Sherpa	1988	Illness
32.Phy Dorje Sherpa	1989	Fall
33.Ang Sona Sherpa	1990	Avalanche
34.Ang Tshering Sherpa	1993	Fall into crevasse
35.Pasang Lamu Sherpa	1993	Cause unknown
36.Sonam Tshering Sherpa	1993	"
37.Mingma Norbu Sherpa	1994	Avalanche
38.Kami Rita Sherpa	1995	Fall
39.Lakpa Nuru Sherpa	1995	Avalanche
40.Zangbu Sherpa	1995	Fall
41.Dawa Sherpa	1996	Avalanche
42.Lopsang Zangbu Sherpa	1996	"
43.Nima Rinzi Sherpa	1997	Fall
44.Tenzi Nuru Sherpa	1997	Lost on return from summit

Source:Nepal Mountaineering Association.

The Figures given above sre just tip of an iceberg as the figures of Sherpas who laid their lives in other mountains of Nepal are not available.

2000年春・ネパール速報

協会事務所にコンピューターが入ったのは1996年の3月であった。わけもわからずにインターネットに接続、5月のエベレストでの大量遭難の様相が、現地の各隊から次々伝えられる様に興奮した。あれから4年、インターネットを通じてもたらされる情報の量は飛躍的に増加するとともに、質の高い情報を提供するホームページ（HP）も増えてきた。HPから得られた情報をもとに構成するのがヒマラヤ・デジタル通信だ。今回は今春のネパールでの日本隊以外の活動を紹介する。

先月号で3月のネパール観光省発表のリストでは31隊だった登山隊がふたを開けてみれば、倍近い隊が登山をしている。半分以上が8千m峰で、エベレストは20隊に近い登山隊を迎えている。ただ既に登山料の高い山では許可を共有する事はあたりまえであり、登山隊を組んでいてもBCより上では各自が勝手に登山を行い、スポンサーも独自に獲得、1人でも「登山隊」を称している者もいる。隊として組織的にルート工作、荷上げをするわけではなく、自分の雇ったシェルパに自分に必要なサポートをしてもらいながら登っているものが多い。運悪くルート先端に立った時、彼等は引き返さざるを得ないのだ。8千m峰のノーマル・ルートでは「登山隊」や所属する「国」という言葉で記録を整理するのは難しい時代となった。

エベレスト（8848m）

ミレニアム（千年紀）ファースト・サミットは5月14日に中国側からロシア隊の4名によってなされた。

翌15日にはネパール側からの2度目の頂上攻撃がなされた。アン・ドルジェ（32）は14日午後4時にBCを出発してスピード登頂記録に挑戦、日付が変わった頃にサウス・コルを出発。途中で頂を目指す3隊に追いつき南峰には9時頃到着。南峰付近には10名以上の登山者がいたようだ。しかし、そこから先のルートは出来ておらず、酸素と固定用ロープを持ったシェルパが10時過ぎに到着、しかし、全員南峰から下降した。96年の時も同じだが、9時に南峰まで達していながら登頂の努力を

しない、出来ない登山者をどう理解するのだろうか。

アン・ドルジェはニュージーランドのガイド登山隊、アルパイン・コンサルタント隊に雇用されたクライミング・シェルパで既に5度エベレストに登頂している。

16日には英国隊の3名（女性1名）とシェルパ2名、スペイン隊2名とシェルパ2名。韓国隊の2名の11名が南東稜から登頂に成功した。

17日8時、日本人には馴染みの深いナジール・ザビールがカナダ人、シェルパ4名と共に南東稜からパキスタン人として初めて世界の頂上に到達した。ナジールは先の15日のアタックにもピーター・ハーベラー等と参加、そのままサウス・コルに残り2度目のアタックで頂を手に入れた。

18日にはネパール女性隊の隊長ラクパ・シェルパが3名の男性シェルパと共に登頂。

19日、サウス・ピラーからデンマーク隊の隊員シェルパ各2名が登頂した。

21日バブ・チリ・シェルパがBCから頂上まで16時間のスピード記録を樹立。

既に登頂を断念してしまったが、アドベンチャー・コンサルタント隊には日本人が1名参加していた。カンチェンジュンガ（8586m）

5月13日に英国隊のジョン・ドイルとシェルパ2名がノーマルルートから登頂した。

ローツェ（8516m）

西面ノーマル・ルートから5月15日にポーランドのピュートル・プストルニクとグルジアのベネディクト・カシャカシャヴィリが登頂した。

19日はスロヴェニア隊の2名と、イタリアのセルジオ・マルティニが登頂。マルティニは7番目の8千m峰14座完登者となった。セルジオは1998年秋にローツェに「登頂」と発表したのが、セルジオ達のすぐ後に登った韓国隊から頂上直下までしか登っていないとのクレームがつき、セルジオもそれを否定しなかった。既に14座完登を宣言していたが、今回の登頂で名実ともに14座完登者の栄冠を手にしたことになる。

2000年春・ネパール登山隊一覧

	山名	標高	ルート	国	隊長	数	
1	エベレスト	8848	南東稜	カナダ	パイロン・スマス	6	○
2	エベレスト	8848	南ピラー	デンマーク	ヘンリック・ヤンセン・ハンセン		○
3	エベレスト	8848	南東稜	インド	Syamal Sarkar	7	
4	エベレスト	8848	南東稜	韓国	Son Jong-Ho	7	○
5	エベレスト	8848	南東稜	ネパール	ラクパ シェルバ	4	○
6	エベレスト	8848	南東稜	スペイン	Antoni Bahi Alburquerque	8	○
7	エベレスト	8848	南東稜	スペイン	Manuel Gonzale Diaz		
8	エベレスト	8848	南ピラー	スペイン	Joan Tomas Gabelli		×
9	エベレスト	8848	南東稜	英国	Gavin Bate	11	×
10	エベレスト	8848	南東稜	英国	Henry B Todd		
11	エベレスト	8848	南東稜	USA	Christine Boskoff	5	
12	エベレスト	8848	南東稜	USA	Robert H Hiffman	8	
13	エベレスト	8848	南東稜	USA	Eric Simonson		
14	エベレスト	8848	南東稜	USA	Randy Todd Burleson		
15	エベレスト	8848	南東稜	USA	Gary J Guller		
16	エベレスト	8848	南東稜	ニュージーランド	Guy Cotter	6	×
17	カンチェンジュンガ	8586	南西面	インド	Sunil Datta Sharma		
18	カンチェンジュンガ	8586	南西面	韓国	Go In Kyung		○
19	カンチェンジュンガ	8586	南西面	スイス	Andre Georges		
20	カンチェンジュンガ	8586	南西面	英国	Andrew Hughes		
21	カンチェンジュンガ	8586	南西面	英国	アラン・ヒンクス	1	
22	ローツェ	8516	西壁	英国	ヘンリー・トードー		
23	ローツェ	8516	西壁	グルジア	Benedict Kashakashvili	9	○
24	ローツェ	8516	西壁	ブルガリア	Borislav Dimitrov		
25	ローツェ	8516	西壁	スロヴェニア	Tomaz Zerovnik	8	○
26	ローツェ	8516	西壁	イタリア	エルジオ・マルティニ		○
27	ローツェ	8516	西壁	ポーランド	ピュートル・プストリニク	7	○
28	マカルー I	8463	北西稜	オーストリア	エリック・リーチ		
29	マカルー I	8463	北西稜	イタリア	Christian Kuntner		
30	マカルー I	8463	北東稜	韓国	Hyoung Woo Kim		
31	マナスル	8163	北東稜	東日本	丸山芳樹	2	
32	マナスル	8163	北東稜	韓国	Han Wang Yong	7	
33	マナスル	8163	北東稜	イタリア	Furanco Brunello	9	○
34	マナスル	8163	北東稜	スペイン	アルベルト・イニユラテギ	3	○
35	ダウラギリ I	8167	北東稜	ドイツ	Hojo Netzer		
36	ダウラギリ I	8167	北東稜	ドイツ	Stadler Peter		
37	マナスル	8163	北東稜	スペイン	Felix Maria I lrate		
38	アンナブルナ I	8091	北面	フランス	Thierry Bolo		×
39	アンナブルナ I	8091	北面	スペイン	Josep A Pujante		
40	アンナブルナ I	8091	北面	USA	Edmund Viesturs		×
41	ギャチュン・カン	7963	南東稜	大阪鋭峰会	城 隆嗣		

	山名	標高	ルート	国	隊長	数	
42	クンバカルナ	7710	北壁	オーストラリア	M・Athol		
43	チャムラン	7319	北壁	英国	Christopfer G Comerie		
44	プモ・リ	7161	南東稜	オーストリア	Gerhard Ferstl		
45	プモ・リ	7161	南西面	USA	Donald Worsham	7	○
46	ティリッチョ・ピーク	7134	北稜	好山会	小池 正器		
47	バルンツェ	7129	南東稜	ドイツ	Gotz Weigand		
48	バルンツェ	7129	南東稜	英国	John Baker		
49	ガネッシュII	7111	南東稜	信州大	吉田 秀樹		
50	アマ・ダブラム	6812	南東稜	オーストラリア	X・ゴンザレス		
51	アマ・ダブラム	6812	南東稜	オーストリア	Theo・Fritscho	5	○
52	アマ・ダブラム	6812	南東稜	メキシコ	Pablo Juarrez Logos		
53	アマ・ダブラム	6812	南東稜	ニュージーランド	David Crafts		
54	アマ・ダブラム	6812	南西稜	USA	Pasquale V Scaturro		
55	アマ・ダブラム	6812	南西稜	USA	Matthew Fioretti		
56	アマ・ダブラム	6812	南西稜	USA	Ronald Matous		
57	アマ・ダブラム	6812	南西稜	USA	David Penney		
58	アマ・ダブラム	6812	南西稜	USA	Jeffrey S Clapp		
59	Ramtang			英国	A J Edington		

マナスル (8153m)

ミレニアム最初の8千m峰の登頂は、4月25日にスペインのアルベルトとフェリクスの子ニユラテギ兄弟他1名によってノーマルルートから成された。二人は12座目のジャイアンツを手に入れた。兄弟はこの後すぐにアンナプルナI峰に向かった。

二人はアンナプルナの後はパキスタンにとんでK2に挑み、20世紀中の8千m峰14座完登を目指している。

5月5日にはフランスの山岳ガイド、J・クリストフィ・ラファイエが北東稜から登頂した。

東欧の小さなヒマラヤ大国

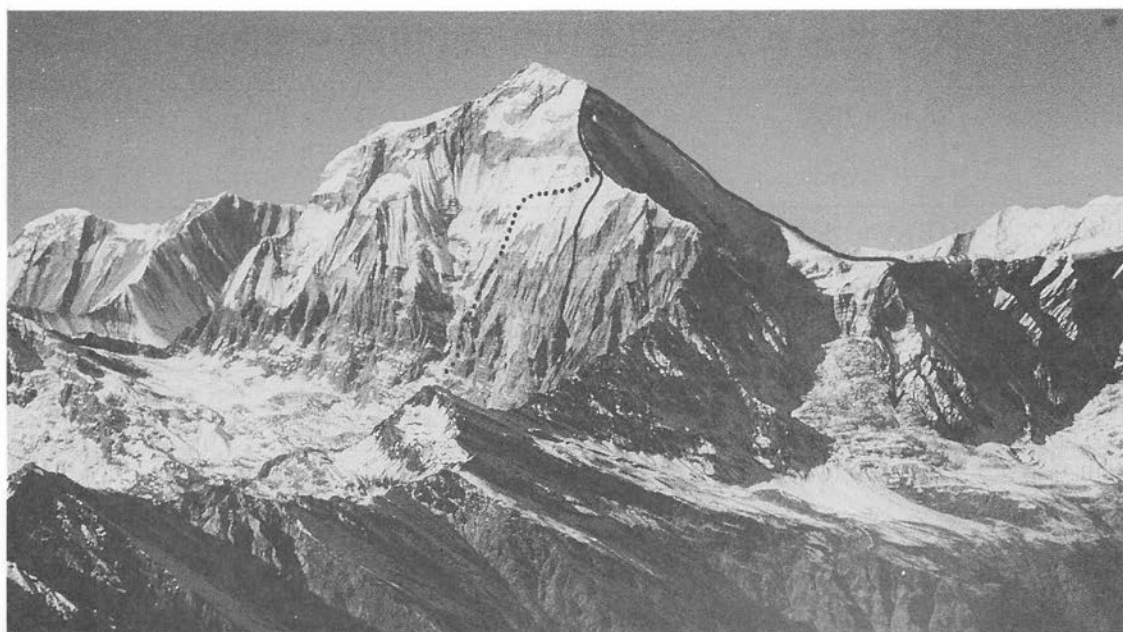
スロヴェニアの軌跡 (上)

中川 裕

1989年秋、ユーゴスラビアの青年が、ジャヌー(7,710m)北壁に単独で挑戦、見事に北壁の中央部から登頂。1978年の山学同志会ルートを下降するという、ヒマラヤ登山史に新たな時代の到来を告げる記録を打ち立てた。彼の名はトモ・チョセン。それから10年、1999年秋、341号で紹介したトマジ・フマルは、頂上こそ逸したものの、ダウラギリI峰(8,167m)南壁のそれまでのルートより文句なく中央に近い部分を単独で登攀して北東稜を下降した。世紀末に出現した二人のヒーローを生み出したのは、スロヴェニアという東欧の小

さな国であった。

スロヴェニアは旧ユーゴスラビア共和国の北部、東はオーストリア、北はハンガリー、南はクロアチア、西はイタリアと国境を接し、一部がアドリア海に面した東京と千葉、埼玉、群馬、神奈川を足したくらいの広さの国土におよそ200万人が住む国である。緯度は北海道より少し北にあり、標高2864mのトリグラフ山を最高峰とする。国名は「スラブ人の国」の意。1991年6月いち早くユーゴスラビアから独立。国民の大半がスロヴェニア人であるが為か、その後のユーゴ内戦からも大き



▲アンナプル南峰からのダウラギリI峰、実線が1981年のルート（写真：山形正己）

な影響を受けず今日に至っている。旧ユーゴ時代から経済的にも成功しており、かつてアルペンスキー三冠王のステンマルク選手が使っていたスキーのメーカー「エラン」はこの国の会社である。

したがって東欧圏でも最高水準のGNPを誇っており、一人あたり6千ドルを越える。ちなみにわが国は3万1千ドルを越えている。

スロヴェニア人は、トルコ、オーストリア＝ハンガリー帝国、ドイツ、そしてユーゴスラビアと常に他民族に支配されてきたが、1991年旧ユーゴの共和国の中で真っ先に独立を宣言した。当時、「水のないプールに飛び込むようなもの。」と評された独立を成し遂げた裏に、「常に冷静である事を誇りとする民族。」「何としてでものり切っていくとする気概に燃えた、気骨のある、冷静で実直な民族。」これは、彼等が成し遂げた登山の成果を考える上でも参考になるかもしれない。

旧ユーゴスラビア時代

年表を見ていただければわかる通り、旧ユーゴスラビアの登山の多くがスロヴェニア人によって成されたものなのである。そのなかでも1979年のエベレスト西稜は包囲戦全盛時代の一つの到達点を示す登山だ。700人のポーターによって運び込まれた18トンの荷物を使い、ロー・ラから西稜を忠実に登るこのルートは、「長大な尾根は、急峻

な壁より難しい。」の典型ともいえ、1984年にブルガリア隊に2登されたが、同ルートを下降した隊員は転落死。他は南東稜を下っており、世界最高峰の最難ルートとの評価もある。

1981年、スタネ・ベラク等3名のパーティーはダウラギリI峰南壁から南東稜、北東稜、そして東面へと16日間に及ぶ登攀を行い世界を驚かせた。8千m峰のバリエーションルートで固定ロープの呪縛を突き抜けた画期的登山である。長期にわたって行動しつづけたその体力は新たな可能性を示すものであった。

80年代、いくつかのジャイアンツでの記録もあるが、彼等はガンガプルナ、トリスル、にみられるような7千m峰のバリエーションへと底辺の広がりを見せる。そのスタイルの多くは固定ロープを使わない最小限のザイルパーティーによるものだ。同じ頃、彼等の多くはパタゴニア等の岩壁にその足跡を刻んでいる。

そうしたエネルギーの蓄積もあってか88年頃からのスロヴェニア人の活躍は目を見張るものがある。その代表がチョセンのジャヌー北壁、ローツェ南壁である。パタゴニアで腕を磨いたカロ、イエグリッチもバギラティIII峰を一撃のもとに完登。イエグリッチはこの年、エベレストにも登頂した。翌年ユーゴスラビアが崩壊する。（以下次号）

スロヴェニア主要登山年表(1975~1990)

1975	マカルー(8,463m)南壁	スタネ・ベラク、マルヤン・マンフレダ、ヤンコ・アズマン・ナイフ・ザプロトニク、イヴォ・コトニク、ヴィクトル・グロシェリ
1976	トリスル(7,120m)西壁	アンドレ・ガッセリ、ステファン・マレンス、ヴェニヤ・マティエヴェク
1977	ガッシャーブルム I (8,068m)西稜	アンドレ・シュトレムフェリ、ナイフ・ザプロトニク
1979	エベレスト(8,848m)西稜	ナイフ・ザプロトニク、アンドレ・シュトレムフェリ、スタネ・ベラク、スティペ・ボジチ
1981	ダウラギリ I 峰(8,167m)南壁(南壁完登)	スタネ・ベラク(40)、ヴィンコ・ベルツイチ(22)、エミル・トラトニク(30)
1983	ガンガブルナ(7,455m)北壁 ガウリシャンカール(7,134m)南壁 南峰(7100m)まで	スタネ・ベラク(43)、マリアン・クラガール(27)、パヴェル・コジェク(24)、エミル・トラトニク(30) スラヴコ・ツァンカール、Smodis、ボヤン・シュロート
1985	ヤルン・カン(8,505m)北壁 ダウラギリ I 峰(8,167m)東壁(東壁完登)	ホルト・ベルガント(31)、トモ・チョセン(26) スタネ・ベラク(45)、イズトク・トマジン(25)、 アンドレ・シュトレムフェリ(29)、マリヤン・クレガール(30)
1986	ブロード・ピーク(8,051m) ガッシャーブルム II (8,035m) K 2 (8,611m)	ヴィクトル・グロシェリ(34)以下12名が登頂。 グロシェリ、ボグダン・ピシヤク(27)、パヴレ・コジェク(27)、 アンドレ・シュトレムフェリ(30) トモ・チョセン(27) 南南西支稜を肩まで。
1987	トリスル(7,120m)西壁 トランゴ・ネームレスタワー(6,251m)南東壁 シヴリン(6,543m)北東壁	ヴェラスタ・クナブエル(24)、サンディ・マリンチッチ(28) 頂上からバラバントで下降。 スラヴコ・ツァンカール、フランチェク・クネズ、 ボヤン・シュロート フランツ・ペベヴニク(28)、ダミヤン・ヴィドマル(26)、 ダニロ・ティッチ(26)
1988	メル(6,450m)東壁 2本の新ルート チャー・オユー(8,201m)北壁	フランチェク・クネズ、マルティン・フラストニク イズトク・トマジン(28)、ヴィクトル・グロシェリ(35)、ヨジェ・ロズマン(33)、 マルコ・プレゼリ(23)、ラドヴォイ・ナドヴェシニク(23)、 ロマン・ロバス(46)、ブラジ・イエレブ(28)
1989	ジャヌー(7,710m)北壁 バギラティ II (6,512m)南西壁 ガンガブルナ(7,455m)北壁 シシャパンマ C (8,012m)南西壁	トモ・チョセン、 フランチェク・クネズ、アンドレア・フラストニク スタンコ・ミエフ、ロク・コラル アンドレ・シュトレムフェリ、パヴレ・コジェク、 フィリップ・ベンツェ、ヴィクトル・グロシェリ
1990	ローツェ(8,516m)南壁 バギラティ III (6,454m)西壁	トモ・チョセン シルヴォ・カロ、ヤネズ・イエグリッチ

地域ニュース

《ネパール》

観光客(航空機使用)変遷

月	1998	1999	前年比
1	25,299(8,413)	25,264(9,195)	-0.14(9.30)
2	31,099(9,182)	32,439(8,865)	4.31(-3.45)
3	33,162(8,085)	36,650(8,055)	10.52(-0.37)
4	36,713(12,109)	35,822(11,146)	-2.43(-7.95)
5	32,312(18,936)	38,669(20,407)	19.67(7.77)
6	26,563(19,502)	27,661(18,321)	4.13(-6.06)
7	24,404(12,233)	23,551(10,403)	-3.50(-14.96)
8	29,332(9,579)	29,230(9,044)	-0.35(-5.59)
9	33,878(10,192)	38,482(10,465)	13.59(2.68)
10	53,257(12,653)	57,894(12,436)	8.71(-1.72)
11	40,460(8,755)	42,030(10,028)	3.88(14.54)
12	31,529(13,590)	33,496(12,265)	6.24(-9.75)
合計	398,008(143,229)	421,188(140,630)	5.82(-1.81)

(注) () 内はインド人

上記、国別(インド除く)上位

月	米国	日本	英国	独国	仏国	新国	伊国
1	2,445	2,169	1,579	1,157	742	838	679
2	2,604	3,374	2,687	1,788	1,821	1,078	921
3	3,595	3,594	3,744	2,936	2,131	1,106	814
4	2,949	2,402	2,804	1,883	2,835	1,064	852
5	2,733	1,610	1,431	1,407	1,225	586	500
6	1,789	787	1,028	607	371	179	220
7	1,584	1,216	1,355	910	987	586	641
8	1,840	2,820	1,413	1,160	1,838	509	2,183
9	3,085	2,525	2,928	2,533	2,048	1,209	977
10	6,453	3,382	5,440	4,627	4,086	2,790	1,586
11	3,954	4,463	3,725	2,376	2,252	1,267	973
12	2,551	3,988	2,649	1,303	967	776	611
合計	35,582	32,330	30,783	22,687	21,303	11,988	10,957

チュルー・イーストに登頂

チュルー・イーストの登頂を目指していた労山隊(近藤和美(58)隊長ら5名)は、5月4日に全員が登頂に成功した。他の4名は、永田幸一(42)、

大神田伊曾美(56)、久保輝昭(60)、中村洋一(61)各隊員。

イムジャ・ツェに登頂

イムジャ・ツェを目指していた北海道酪農大隊(森下亮太郎(23)隊長ら4名)は、4月13日隊長が登頂に成功した。

《中国》

海峡兩岸隊がチョゴリ(8,611m)へ

中国と台湾の合同登山隊が、今夏チョゴリ北稜の登頂を目指すことになった。中国側は、現在八千メートル峰14座全山登頂を目指しているチベット登山隊が中心となる。メンバーは下記のとおり。

・中国側

隊長：桑珠、副隊長：王勇峰、コーチ：羅申
隊員：次仁多吉、仁那、加布、達穷、洛則、阿克布、辺巴扎西、次洛、木世俊

・台湾側

隊長：周徳九他7名

Y.C.Cがチョゴリへ

東京Y.C.Cは今夏、中国側のチョゴリへ登山隊(坂本正治(40)隊長ら4名)を派遣する。同隊は北稜を予定している。他のメンバーは、北村俊之(37)、道家博司(33)、船山和志(27)。

トピックス

山本俊雄さんがエヴェレスト
最高齢登頂を更新

法政大学隊でチョモランマ北稜に挑戦していた山本俊雄(63)が、5月19日登頂に成功し、これまでの高令記録だった60歳を抜いて記録を更新した。また、同日同ルートから登頂した東北海登研隊の今野一也(61)さんも、これまでの記録を更新した。

労山が創立40周年を迎える

日本勤労者山岳連盟(西本武志理事長)は、創立40周年を迎え、5月13日(土)、日本青年館で祝賀

会を開催し、翌14日(日)同館でピット・シューベルト氏の記念講演会を行った。

BOOKS

夢 時を越えて

シルバートートルが、91年チョー・オユー、94年ダウラギリ I、98年ガッシャーブルム II に派遣した登山隊の報告書。

3つの隊の報告ともなると雑多な要素が入り込んで読み物としては面白い。特に最近のG IIの報告は考えさせられることが多い。

B5判 216頁 他にカラー24頁

〒151-0053 渋谷区代々木3-15-3-301大斗建築

ヒマラヤから

G II 便り

ナマステ!!

私達信州大学ガネッシュ・ヒマール峰登山隊は、

4月9日無事ベースキャンプに到着しました。キャラバンルートのブリガンダキ川支流ヤラ・コーラは、1980年の1次隊は積雪のため、82年の2次隊は山ヒル地獄のため、非常に苦労しました。しかし、今回は石楠花とサクラソウの花盛りの中、何のトラブルもなく、全員元気に快適なキャラバンを楽しめました。4月12日より登山活動に入ります。とり急ぎ御連絡まで。

岩崎洋さんほどではありませんが、秘境の旅を楽しんでいます。人が入らないのですので良い所です。

4月10日 BCにて 田辺 治

東京集会のお知らせ

日時 6月26日(月)午後7時～
内容 ヤンラ・カンリ登山について
場所 HAJルーム(地下鉄有楽町線東池袋下車4番出口から地上に出て右へ徒歩2分)
又は、JR大塚駅下車、都電荒川線の早稲田方面2つ目の東池袋4丁目下車、前方で右に折れて地下鉄出口から徒歩2分)

山の情報誌「岳人」

GAKUJIN

岳人

毎月15日発売(日・祝日の場合は前日) 定価700円

■本誌の年間購読ご案内

本誌の購読は、全国の書店、東京新聞販売店、中日新聞販売店、北陸中日新聞販売店で承ります。直接購読ご希望の方は、とじ込みの振替用紙に「岳人何月号」からとお書きのうえ、送り先郵便番号、住所、氏名を明記して、ご送金ください。郵送料は124円です。年間購読料は8,900円で送料は当社負担です。お求めの本誌に乱丁、落丁がありましたらお取り替えいたします。

2000年

特集

- | | |
|-------|------------------|
| ★ 1月号 | 雪山入門 日本の山を楽しむために |
| 2月号 | 現代山岳スキー 思想・用具・記録 |
| ★ 3月号 | 日帰り縦走、ひと味違うハイキング |
| 4月号 | 日本列島、恵みのブナの森を訪ねて |
| ★ 5月号 | 陽光の日本アルプス |
| ★ 6月号 | 日本全国、知られざる花の名峰 |
| 7月号 | 夏こそ、海と島の山旅 |
| 8月号 | はるかなる源流の峰々へ |
| 9月号 | 一度は泊まろう静寂の山小屋 |
| ★10月号 | 紅葉のみちのくの山並み |
| 11月号 | 冒険、修験、岩塔の山 |
| 12月号 | 野生動物と出会う山 |

(★は特大号・800円となります)

東京新聞出版局(中日新聞) 〒108-8010 東京都港区港南2-3-13 ☎(03)3740-2674(直)
東京本社 全国の書店で発売中/中日新聞販売店でも取りつぎます

高山病の実態

—死亡に至らなかった事例—

高山病は恐いが、その実態はまだまだ未知の部分が多い。基礎的な知識はもち合わせていても、現場で各人に出る症状は様々であり、それに対応するためには数多い症例を学んでおくことが必要だ。

ここでは、死亡には至らなかったが、対応を一步誤れば重大な結果を招いたと思われるケースなど幾つかの事例を各隊の報告書から紹介する。 (山森 欣一)

凡例：【 】内の数字は、発病高度。5 = 5000m
台での発病を表す。

[]内は、参考にした報告書名。

I、ネパール・ヒマラヤ

I-1 ダウラギリ I (8,167m)

1978年秋 群馬県山岳連盟隊

C隊員(27)は、先端ルート工作で活躍し、9月18日6,450mのC4に到達し、一旦、4,200mのBCに下りて休養し、25日再びC4に入り2日間上部6,850mまでルート工作を行った。27日夜、起座呼吸しているのを隊員が発見。意志の強い隊員で下山を嫌がったが、C3への下りは通常3~4時間のところ丸1日かかって降りて酸素を吸って助かった。BCからさらに3,000mまで下ったが、2~3日は食事以外は寝袋に入って寝ていた。こんなに寝てばかりいるのは、疲労ばかりではなく脳障害による傾眠が考えられる状態であった。

【6】 [峭峻の白き尾根]

I-2 ダウラギリ V(7,618m)~III~II(7,751m)

1979年秋 カモシカ同人縦走登山隊

O登攀隊長(26)は、10月9日III(7,668m)に登頂した。次いで縦走のため13日再びIII峰に登頂後頂上のキャンプに宿泊し、翌日III峰下の7,200mにキャンプを作り宿泊。15日III峰を越えた16時半すぎ失神、その後、21時半III峰とII峰のコルのキャンプに入ったが、ガスバーナーの点火ミスで天幕を燃やしてしまった。ここで酸素を吸入。翌日、午前サポート隊が到着し、酸素を吸入。16時半にII峰頂上の天幕に到着。21時C4まで下山。

【7】 [縦走]

I-3 グルジャ・ヒマール (7,193m)

1985年春 同人青いケシ隊

T隊員(27)は、4月3日BC(4,200m)到着後8日C1(4,700m)入りと同時に下痢が始まった。9日5,000mで激しい腹痛に襲われ立ってられない。悪天のためBCに下山。13日再びC1入りするが胃の調子は悪い。15日血便が出てブスコパンを服用。17日TC2(5,300m)入り。胃は激しく痛む。19日TC2からC2(5,800m)を往復。19日BCへ下る。23日C1、24日C2に登ってTC泊まり。25日C2入り。26日C3(6,500m)入りを目指したが6,000m付近で激しい胃痛のため断念し下山途中で吐血。27日C2からBCへ下山するが、2名のシェルパの付き添いが必要だった。

【5】 [青いケシ]

I-4 ラムジュン・ヒマール (6,983m)

1976年春 高知県山岳連盟隊

T登攀隊長(34)は、4月19日C2(5,450m)入りしてここをベースに上部で活動し、25日一度C3(6,000m)へ荷上げし27日C3入り。28日第二次アタックのためC4(6,450m)入りした。29日午前6時半C4から1ピッチの所で「ツバでなくアワのようなものがごろごろと口へ上がって来て、吐き出すとピンク色の痰が出る。呼吸も困難」と報告。ドクターストップがかり、すぐに下山開始。8時20分C3から来た救援隊と共にC3を経由して、14時25分C2到着。歩くと10歩で座り込んでしまう。C2泊まり。翌日4名の付添いでBC着。医師の所感は「無事に救出し得たのは、タイミング良く、一日に1,300mの高度差を下ろし得た事以外には考えられない。今回は全く幸運であったと言うべきであろう。」と報告している。また、二次隊でTとずっと一緒だった隊員は、T

隊員について「風邪をこじらし、登攀力もおちていた。C3で将棋をしていて「寒い寒い」と言っていた。C4へ登ってからもテントの外で第一次隊の登攀を見守っており、かなり無理をしていたと思う」と報告している。なお、この隊は所謂鋸齒状の行動をとっていなかった。

【6】 [Lamjung Himal 6,983m]

I-5 ガネッシュ・ヒマールIV (7,052m)

1978年春 日本勤労者山岳連盟隊

Y隊員(25)は、9月11日BC(3,700m)到着後、順調に登山活動を行い、10月4日初めて5,400mのC3に宿泊したが、翌日そのC3が雪崩の襲撃を受けテントを切り開いて脱出。この日BCまで降りた。その後下部キャンプで順次荷上げに従事して、12日初めてABC(5,700m)に登り、さらに上部ヘルート工作しABCに泊まった。13日5kgの荷上げであったが体調悪く、ルート工作の最高点まで行けなかった。夜、あまり食欲もなく疲労感と寒さを感じた。そして眠りに入ったまま、意識不明となり、14日隊員によって仮C3まで降ろされ酸素吸入が行われ意識が戻った。その夜自力で用便ができるまで回復。15日4人に確保されてC2へ下山。16日BCへ降りた。

【5】 [憧憬の白き女神]

I-6 ガネッシュ・ヒマールIII(7,111m)

1981年春 日本大学理工学部隊

O隊員(24)は、ABC(5,800m)で激しい頭痛を訴えて隊員に付き添われて下山。下山途中では、まるで夢遊病者の様な足どりであり、ザックを落としたり、8メートル程スリップしたりであったが、本人は、ザックは置いたのであり、滑ったのはグリセードをしたのであった。意識障害が認められ、一見して脳浮腫を思わせた。BC(4,750m)で点滴後終了時には、意識もかなりはっきりし、起き上がっては、よろよろと小便に行けるようになった。翌日TBC(4,050m)まで降ろし休養したが、その後は極めて短時間に復調し、再度上部キャンプで活躍した。(同行医師の報告)

【6】 [美しき女神]

I-7 サガルマータ (8,848m)

1970年春 日本山岳会隊

N隊員(29)は、4月18日C1(6,150m)嗜眠状

態。19日午前3時脈不正直ちに酸素吸入。いままでのことをはっきり記憶していないという。酸素吸入続行。20日午前2時自分のテントにいないと探すとシェルパのテントにいた。酸素吸入。

H隊員(31)は、4月21日C3(6,980m)からルート工作に出たが、途中で体調悪く隊員が付き添ってC2(6,450m)へ下降。歩行不能の状態ですぐに酸素吸入を行う。

【7】 [山岳第六十六年]

I-8 プモ・リ(7,161m)

1971年春 富士宮山岳会隊

M隊員(29)は、4～5日前から咳が激しく安静にしていたが、4月26日朝BC(5,100m)で突然意識不明となり、シェルパに背負われ隊員3名に付き添われてクンデの病院に収容され、急性肺炎と診断された。

【5】 [プモ・リ]

I-9 ローツェ(8,516m)

1983年秋 カモシカ同人隊

K隊員(27)は、ローツェ登頂後脳に障害が出て帰国後の診断で脳血栓と判明する。

【8】 [ダンプさんのエベレスト日記]

I-10 ローツェ・シャル(8,400m)

1965年春 早稲田大学隊

M隊員(29)は、4月4～5日にC2(6,350m)からルート工作を行ったが、血痰が出る、顔にむくみ、痔の悪化などから一旦BC(5,350m)に下降した。13日C1(5,850m)、14日C2、17日6,650mのC3入り。翌18日C4(7,050m)入りした直後にN隊員の遭難救助作業に入り、7,000m付近で一晩シュラフ・羽毛服もないまま付き添う。19日22時過ぎC4まで救出。4人用天幕に9人が入る。20日荒天、再び遭難現場から天幕回収。この夜もC4泊まりとなったが夜の記憶は全くない。21日荒天、C4にいたが、ぼんやりかすんでいてははっきりおぼえがない。21日C4からN隊員の引き降ろし作業。作業中の隊長がスリップしたため100m下で作業中止となった。M隊員がC3に下降したのは、午前1時を過ぎていた。23日C3泊まり。24日医師に付き添って上を往復。25日上の天幕まで往復。26日C3泊まり。27日N隊員をC3に収容。28日C2に収容。M隊員は映画のカメ

ラを廻す。29日C2にてシェルパの凍傷の手当てをし、夜、新聞への原稿を書いた。用を足して寝るつもりで立ち上がろうとした。シュラフに足がからんだ。この時、脳に鋭いショックを受けて身体が暗黒の世界に沈んで行くのを覚えた。それから一ヶ月の記憶がない。5月10日シェルパに担がれてBCまで下山した。

【7】 [幻想のヒマラヤ]

I-11 タムセルク (6,608m)

1979年春 山学同志会隊

O隊員(25)は、4月23日5,900m、24日6,100mにビバークし、25~26日上部のルート工作を行い、6,300mに達したが、ここで重度の高山病となり、3日間かけて残る4隊員によってBCへ降ろされた。

【6】 [山岳年鑑'80]

I-12 バルンツェ (7,220m)

1980-81年冬 北海道大学隊

S医師(24)は、キャラバン中の11月17日朝から体調が悪く体がふらふらした。歩き始めたが体が左右に大きく傾いたり、小さくフラフラしたり、歩行の様子があぶなっかしかつたらしい。一時間ほど歩いたところで突然崩れるように倒れた。一日がかりで3人のポーターに背負われて下へ降りた。下では最初の二日間はほとんど歩けずぼぼねたきりの状態。それから10日後にBC(5,000m)に入った。12月2日C1(5,130m)へ。12月11日C2(5,720m)往復し12日C2入り。13日C3(6,140m)へたどり着いたものの疲労困憊した状態で一夜を明かすことになり、14日の記憶は定かではない。食事には全く手をつけなかったようだ。意識障害である。15日二人の隊員に支えられてC2へ。16日C1への途中から歩けなくなり背負われてC1へ。この夜、両眼の中心暗点、手足のしびれなど気が付く。17日C1からBCへは歩くことができず背負われたまま降りた。BCでは三日後から日常生活ができるようになった。(医師本人の報告)

【5】 [バルンツェ厳冬期登頂報告]

I-13 マカルーII (7,640m)

1977年春 千葉大学隊

A隊員(女24)は、BC(4,800m)に入って5日

目の3月25日に初めてC1(5,300m)の荷上げに登ったが、届かずこの日9時間行動し、BCにて夜嘔吐し、翌朝には意識レベルの低下がみられほとんど自力で歩くことができず、食事もできない状態となった。酸素吸入を行ったところ意識はやや回復したので、BCから4,180mのジャークまでの荷上げを行った。

【5】 [東ネパール・タムール流域の生態学的調査とマカルーII峰登山]

I-14 カンチェンジュンガ (8,586m)

1981年春 日本ヒマラヤ協会隊

S隊員(25)は、3月15日ツェラム(3,800m)からラムゼー(4,350m)に入った後、4,800mまで登りラムゼーに下降。17日~18日高所順応で4,800mの峠に立ったが、21日一人で小便にも行けないような状態となった。このため、酸素を吸入し、翌日ポーターが背負いリーダーを付き添わせて2,800mまで降ろす。その後S隊員は前線に復帰し7,800mまで到達した。

【4】 [ヒマラヤNo.115]

I-15 カンチェンジュンガ (8,586m)

1998年春 日本山岳会隊

O隊員(31)は、北壁を無酸素で行動し5月14日夜7,900mの最終キャンプで睡眠用酸素を吸い、翌日無酸素で登頂に成功した。しかし、下山中にクローアール内でルートを見失い、一緒にいたA隊員とも離れ離れになり、だんだんと目が見えなくなってきた。このため8,100mでツェルトも食糧もなく、目の見えないままビバーク。翌日、C3から酸素を持った救援隊によって救出された。

【8】 山と渓谷756号 1998年7月号

標高6,000m以上の峰

ヒマラヤ登山 日本人死亡者(原因別)

山森 欣一

番号	遭難月日	遭難者氏名・年齢	国	山名	標高	派遣母体名	雪崩	滑落	高病	行方	他	高度別
001	1961, 5, 11	森本 嘉一(41)	N	ランタン・リルン	7225	大阪市立大学	001					7-001
002	"	大島 健二(26)	"	"	"	"	002					7-002
003	1964, 4, 9	大滝 明夫(29)	N	ギャチュン・カン	7922	全日本山岳連盟		001				7-003
004	1965, 8, 19	中村 岳生(25)	P	クンヤン・キッシュ	7852	東京大学	003					7-004
005	1968, 6, 24	小原 ケイ(40)	I	シックル・ムーン	6574	登歩渓流会		002				6-001
006	7, 29	黒宮 義孝(23)	P	コー・イ・パンダカー	6843	愛知学院大学		003				6-002
007	8, 23	村田 俊雄(32)	P	南アトラック・ゾム	6241	札幌医科大学		004				6-003
008	1969, 7, 31	森本 隆(32)	P	イストル・オ・ナール	7403	関西学院大学		005				7-005
009	1970, 4, 21	成田 潔思(28)	N	サガルマータ	8848	日本山岳会			001			8-001
010	4, 24	板矢 晏男(25)	N	パウダ	6672	慶応大学		006				6-004
011	5, 1	菊地 裕介(23)	N	ツクチュ・ピーク	6920	早稲田大学		007				6-005
012	10, 19	渡部 洋(26)	N	ガディ・チュリ (P29)	7871	大阪大学		008				7-006
013	1971, 5, 4	佐藤 正敏(22)	N	アンナプルナII	7937	信州大学		009				7-007
014	5, 4	手塚 英信(30)	N	ダウラギリV	7618	県嶺山岳会		010				7-008
015	"	柳沢 利文(27)	"	"	"	"		011				7-009
016	"	青木 憲一(23)	"	"	"	"		012				7-010
017	7, 23	三上 勲(26)	P	ウドレン・ゾム南峰	7050	下関山岳会		013				7-011
018	10, 6	千々岩 玄(29)	N	ダウラギリV	7618	九州大学	004					7-012
019	10, 16	小木曾 巖(29)	N	ガンガブルナ	7454	長野県山岳協会	005					7-013
020	"	笹川 広平(25)	"	"	"	"	006					7-014
021	"	箱山 益夫(23)	"	"	"	"	007					7-015
022	10, 20	高木 邦夫(28)	N	マカルーII	7640	千葉大学			002			7-016
023	1972, 4, 10	安久 一成(34)	N	マナスル	8163	韓国	008					8-002
024	4, 28	松井高重郎(34)	N	ダウラギリIV	7661	群馬県山岳連盟			003			7-017
025	5, 5	高橋 進(23)	N	ナンパ	6754	青森県山岳連盟		014				6-006
026	5, 16	井本 貴子(23)	I	ディオ・ティバ	6001	ガネッシュ会			004			6-007
027	1973, 5, 14	松田 隆雄(31)	N	ヤルン・カン	8505	京都大学		015				8-003
028	5, 18	高橋 貞利(37)	N	アンナプルナI	8091	J A C ・信濃	009					8-004
029	"	浜 正則(36)	"	"	"	"	010					8-005
030	"	片桐 一三(23)	"	"	"	"	011					8-006
031	"	牛越 正(30)	"	"	"	"	012					8-007
032	10, 8	押谷 光喜(30)	N	キュンカ・リ	6979	瀬戸水南山岳会	013					6-008
033	"	鈴木 慎一(25)	"	"	"	"	014					6-009
034	"	加藤 学(22)	"	"	"	"	015					6-010
035	10, 12	出口 光男(20)	N	プタ・ヒウンチュリ	7246	四日市山岳協会	016					7-018
036	"	水谷 勇(25)	"	"	"	"	017					7-019

番号	遭難月日	遭難者氏名・年齢	国	山名	標高	派遣母体名	雪崩	滑落	高病	行方	他	高度別
037	1974, 5, 5	鈴木 貞子(30)	N	マナスル	8163	ユングフラウ		016				8-008
038	8, 6	糸川 透(26)	P	ブニゾム北峰	6338	山岳同人 仙人		017				6-011
039	9, 1	高木 真一(24)	P	K12	7468	京都大学		018				7-020
040	"	伊藤 勤(24)	"	"	"	"		019				7-021
041	1975, 3, 26	沼尾 吉忠(25)	N	ダウラギリ I	8167	東京都山岳連盟	018					8-009
042	"	井村 哲(23)	"	"	"	"	019					8-010
043	5, 9	河津 士郎(31)	N	ダウラギリ IV	7661	大阪府山岳連盟		020				7-022
044	"	安田 悦郎(27)	"	"	"	"		021				7-023
045	8, 3	伊藤 寿(43)	P	マルビティン中央峰	7260	J A C・岩手		022				7-024
046	8, 16	高地 悟(28)	I	シッケル・ムーン	6574	自衛隊山の会					001	6-012
047	11, 4	高頭 清次(28)	N	カンジロバ	6882	月稜会	020					6-013
048	1976, 5, 27	宮本 武敏(29)	P	ガッシャーブルム II	8035	登攀倶楽部岐阜		023				8-011
049	"	平松 義範(26)	"	"	"	"		024				8-012
050	6, 1	松村 修(34)	"	"	"	"			005			8-013
051	7, 13	坂本 輝夫(26)	P	ラトック I	7145	泉州山岳会		025				7-025
052	9, 6	竹本 広泰(27)	I	ホワイトセール	6455	霧峰山岳会		026				6-014
053	1977, 5, 13	近藤 芳春(33)	N	ヒマルチュリ	7893	明治大学					002	7-026
054	7, 9	天神園光徳(21)	P	バトゥラ I	7785	東京都庁山岳部	021					7-027
055	1978, 4, 22	永沼 勝巳(33)	N	ダウラギリ I	8167	イエティ同人			006			8-014
056	6, 20	亀井 建樹(27)	P	ハチンダール・キッシュ	7163	山嶺登高会		027				7-028
057	7, 24	尾上 均(30)	P	ジュトマル・サール	7330	東京志岳会	022					7-029
058	"	横内 正(26)	"	"	"	"	023					7-030
059	"	佐藤 正寛(25)	"	"	"	"	024					7-031
060	8, 2	馬場口隆一(30)	P	ガッシャーブルム V 東峰	6900	碧稜山岳会		028				6-015
061	9, 14	牛沢 守(30)	N	ガディ・チュリ (P 29)	7871	ツラギの会	025					7-032
062	"	万実 久次(28)	"	"	"	"	026					7-033
063	"	高橋 義文(23)	"	"	"	"	027					7-034
064	9, 23	阿久沢 広(35)	N	ダウラギリ I	8167	群馬県山岳連盟	028					8-015
065	"	深沢勇二郎(28)	"	"	"	"	029					8-016
066	"	小林 清(28)	"	"	"	"	030					8-017
067	10, 23	小暮 勝義(35)	"	"	"	"	"	029				8-018
068	1979, 7, 28	斎藤 清平(35)	P	ゴーカール・サール	6249	白河山岳会	031					6-016
069	"	仲西 昌寛(45)	"	"	"	"	032					6-017
070	"	固山 良三(41)	"	"	"	"	033					6-018
071	"	関口 修克(38)	"	"	"	"	034					6-019
072	"	鈴木 仁(31)	"	"	"	"	035					6-020
073	"	志賀 文孝(29)	"	"	"	"	036					6-021
074	8, 6	岡 正範(30)	P	テラム・カンリ III	7382	弘前大学		030				7-035
075	10, 9	藤井 博子(28)	N	ヒウンチュリ	6441	しゃくなげ同人	037					6-022
076	10, 9	山崎のり子(28)	N	ヒウンチュリ	6441	しゃくなげ同人	038					6-023
077	1980, 2, 16	藤原八十八(30)	N	バルチャモ	6187	GDモレーヌ		031				6-024
078	"	山崎 次男(36)	"	"	"	"		032				6-025
079	4, 26	田辺 郁夫(36)	N	アンナプルナ II	7937	上市峰窓会		033				7-036

番号	遭難月日	遭難者氏名・年令	国	山名	標高	派遣母体名	雪崩	滑落	高病	行方	他	高度別
080	1980, 5, 2	宇部 明(31)	C	チョモランマ	8848	J A C	039					8-019
081	10, 9	照井 博(35)	N	ガネッシュ・ヒマールII	7111	愛知ヒマラヤ	040					7-037
082	"	黒岩 薫(26)	"	"	"	"	041					7-038
083	"	水野 勝(22)	"	"	"	"	042					7-039
084	1981, 1, 12	竹中 昇(28)	N	サガルマータ	8848	明治大学		034				8-020
085	1, 29	岩田 達司(32)	I	パンワリドワール	6663	九山同人	043					6-026
086	5, 10	藤原 裕二(34)	C	ミニヤ・コンカ	7556	北海道山岳連盟		035				7-040
087	"	島田 昌明(28)	"	"	"	"		036				7-041
088	"	佐々木 茂(31)	"	"	"	"		037				7-042
089	"	浦 光夫(32)	"	"	"	"		038				7-043
090	"	中嶋 正博(35)	"	"	"	"		039				7-044
091	"	松永 浩(28)	"	"	"	"		040				7-045
092	"	小田島 均(34)	"	"	"	"		041				7-046
093	"	小野寺忠一(29)	"	"	"	"		042				7-047
094	7, 7	竹辺 光一(30)	P	ガッシャーブルムIV	7980	関西クライマー	044					7-048
095	"	白沢 裕之(26)	"	"	"	"	045					7-049
096	"	西岡 寛和(21)	"	"	"	"	046					7-050
097	7, 23	寺西 洋治(36)	C	コングレー	7719	京都カラコルム				001		7-051
098	"	嶋 満則(36)	"	"	"	"				002		7-052
099	"	松見 新衛(35)	"	"	"	"				003		7-053
100	8, 8	金沢 直子(26)	I	クン	7077	杉並勤労者山岳会			007			7-054
101	9, 3	小美浪洋子(32)	I	ジャオンリ	6632	同人タンネ	047					6-027
102	"	田島よう子(33)	"	"	"	"	048					6-028
103	"	加藤れい子(27)	"	"	"	"	049					6-029
104	9, 6	中村 宣幸(22)	I	ホワイト・セール	6446	一橋大学				004		6-030
105	"	土方 浩(22)	"	"	"	"				005		6-031
106	"	万濃 英士(21)	"	"	"	"				006		6-032
107	9, 27	藤倉 和美(31)	I	ナンダ・カート	6611	H A J	050					6-033
108	"	鈴木 陽一(29)	"	"	"	"	051					6-034
109	"	阿部 直彦(35)	"	"	"	"	052					6-035
110	"	本田 荘八(30)	"	"	"	"	053					6-036
111	"	埜口 正則(29)	"	"	"	"	054					6-037
112	"	寺本 政幸(30)	"	"	"	"	055					6-038
113	"	斎藤 孝雄(35)	"	"	"	"	056					6-039
114	9, 29	坂本 武(29)	N	ガンガブルナ	7454	明治大学駿台	057					7-055
115	"	鈴木 明(24)	"	"	"	"	058					7-056
116	10, 11	市川 協一(29)	N	アンナブルナII	7937	大阪登攀クラブ		043				7-057
117	10, 31	加藤 康二(32)	N	アンナブルナI	8091	イエティ同人		044				8-021
118	1982, 4, 24	岡部 政美(30)	N	アンナブルナIII	7555	愛知県三河合同	059					7-058
119	5, 1	菅原 信(28)	C	ミニヤ・コンカ	7556	市川山岳会					003	7-059
120	5, 17	和田 実(33)	C	ポーロン・リ	7292	大分県山岳連盟		045				7-060
121	6, 26	市川 寛一(24)	P	バスー	7244	諏訪山岳会			008			7-061
122	8, 9	勝山 教孝(31)	I	クン	7077	H A J					004	7-062
123	8, 15	柳沢 幸弘(27)	C	チョゴリ	8611	日本山岳協会		046				8-022
124	8, 19	慶野 順一(31)	I	ヌン	7135	東京山岳協会					005	7-063

番号	遭難月日	遭難者氏名・年令	国	山名	標高	派遣母体名	雪崩	滑落	高病	行方	他	高度別
125	8,31	坂野 俊孝(38)	C	チョゴリ	8611	日本山岳協会					006	8-023
126	9,27	中谷 武(27)	C	ミニヤ・コンカ	7556	市川山岳会			009			7-064
127	10,18	赤松 進(27)	N	アンナブルナ I	8091	イエティ同人	060					8-024
128	"	小野 幹雄(28)	"	"	"	"	061					8-025
129	12,18	佐久間 隆(32)	N	マナスル	8163	H A J		047				8-026
130	12,27	加藤 保男(33)	N	サガルマータ	8848	イエティ同人					007	8-027
131	"	小林 利明(34)	"	"	"	"					008	8-028
132	1983, 5,23	碓 宏一(21)	N	チャマール	7187	慶応大学	062					7-065
133	6,17	志村 一夫(32)	P	ナンガ・バルバット	8126	登歩渓流会	063					8-029
134	7,12	山田 信義(44)	P	ナンガ・バルバット	8126	福岡登高会	064					8-030
135	"	飯田 敏(46)	"	"	"	"	065					8-031
136	"	高森雄一郎(30)	"	"	"	"	066					8-032
137	10, 6	長谷 伸宏(27)	N	ヒマルチュリ	7893	香川勤労者連盟		048				7-066
138	"	藤田 雅之(31)	"	"	"	"		049				7-067
139	10, 7	禿 博信(31)	N	サガルマータ	8848	イエティ同人		050				8-033
140	10, 8	吉野 寛(33)	"	"	"	"		051				8-034
141	10,21	安田 幸保(33)	N	ピサン・ピーク	6091	スカイ			010			6-040
142	1984, 7,上	角田 不二(31)	P	ナンガ・バルバット	8126	H A J	067					8-035
143	"	今給黎宣幸(28)	"	"	"	"	068					8-036
144	"	肥田 繁男(26)	"	"	"	"	069					8-037
145	"	小暮 孝(26)	"	"	"	"	070					8-038
146	9, 9	西野 正晃(30)	I	クン	7077	旭川志岳会	071					7-068
147	10,10	竹内 勝彦(30)	I	シヴリン	6543	室蘭山岳連盟					009	6-041
148	12, 8	瓶田 裕己(29)	P	ナンガ・バルバット	8126	山岳同志会		052				8-039
149	1985, 3, 4	田山 信明(22)	N	クワンデ	6011	酪農学園大学		053				6-042
150	4,29	小林 昭一(44)	N	グルジャ・ヒマール	7193	同人 青いケシ		054				7-069
151	5, 4	石橋 真(32)	N	アマ・ダブラム	6812	山岳同志会		055				6-043
152	5,10	酒井 健作(28)	N	ガウリシャンカール	7134	ラ・ネージュ		056				7-070
153	6,24	中野 融(38)	P	ガッシャーブルム II	8035	フランス		057				8-040
154	9,17	石井 慎一(33)	C	チョモランマ	8848	ウータンクラブ	072					8-041
155	9,20	横川 幸司(29)	I	テレイ・サガール	6904	ポリニエ		058				6-044
156	10, 8	斎藤 茂樹(29)	I	ケダルナート	6968	兵庫勤労者連盟	073					6-045
157	1986, 1, 5	門元 厚嘉(27)	N	タウチュ	6501	カトマンズクラブ		059				6-046
158	6,25	神田 久雄(28)	P	チリン東峰	7038	横浜山岳会		060				7-071
159	7,20	飯田 龍平(22)	P	ディラン	7256	関西学院大学		061				7-072
160	9,19	峯本 枢(31)	I	クン	7077	大阪工業大学		062				7-073
161	10,上	鈴木 荘平(38)	I	メルー北峰	6450	倶楽部 求道心	074					6-047
162	"	田村 省司(31)	"	"	"	"	075					6-048
163	"	小林 一弘(23)	"	"	"	"	076					6-049
164	10,26	中村 日出(31)	N	ヒマルチュリ	7893	日本大学		063				7-074
165	11,20	松本 秀則(39)	N	メラ・ピーク	6473	群馬県			011			6-050
166	12,中	富士居孝明(24)	N	クワンデ	6011	春日井山岳会		064				6-051
167	"	松熊 朝夫(28)	"	"	"	"		065				6-052
168	1987, 3,13	金森竜一郎(22)	N	メラ・ピーク	6473	北海道大学	077					6-053

番号	遭難月日	遭難者氏名・年令	国	山名	標高	派遣母体名	雪崩	滑落	高病	行方	他	高度別
169	1987, 7, 19	大沼 拓実(34)	P	クンヤン・キッシュ	7852	サンナビキ同人					010	7-075
170	8, 24	鈴木 章(32)	P	K 2	8611	東洋大学		066				8-042
171	9, 2	横山 正夫(44)	C	チョモランマ	8848	防衛大学		067				8-043
172	10, 28	工藤 一義(43)	N	マナスル	8163	青森県山岳連盟			012			8-044
173	12, 20	小林 俊之(22)	N	アンナプルナ I	8091	群馬県山岳連盟		068				8-045
174	"	斎藤 安平(34)	"	"	"	"		069				8-046
175	1988, 4, 21	水腰 英隆(48)	N	サガルマータ	8848	J A C			013			8-047
176	7, 15	徳田 仁(25)	P	サニ・ボククシュ	6885	大阪歯科大学			014			6-054
177	9, 29	森 明彦(43)	N	アンナプルナ I	8091	どんぐり山の会	078					8-048
178	10, 17	馬場 信一(27)	N	ギャチュン・カン	7952	福岡大学		070				7-076
179	1989, 3, 21	二見 教行(29)	N	ランタン・リルン	7225	法政大学	079					7-077
180	"	桑島 泰久(23)	"	"	"	"	080					7-078
181	"	久本 真寛(20)	"	"	"	"	081					7-079
182	7, 16	馬場 哲也(29)	P	ナンガ・バルバット	8126	東京農業大学					011	8-049
183	8, 16	北沢 真一(37)	S	ハン・テングリ	7010	日本勤労者山岳		071				7-080
184	1990, 3, 28	森 佳那(22)	N	ブモ・リ	7161	徳島大学		072				7-081
185	8, 12	西堀 秀二(40)	C	トムール	7439	横浜市立大学	082					7-082
186	"	井上 誠(28)	"	"	"	"	083					7-083
187	"	伊東 昌彦(21)	"	"	"	"	084					7-084
188	8, 18	中島 修(28)	P	ナンガ・バルバット	8126	川崎教員		073				8-050
189	9, 27	館野 秀夫(41)	C	クラウン	7295	H A J	085					7-085
190	"	菅沼 勲(60)	"	"	"	"	086					7-086
191	1991, 1, 3	井上 治郎(45)	C	メイリー・シュエシャン	6740	京都大学	087					6-055
192	"	佐々木哲男(38)	"	"	"	"	088					6-056
193	"	清水 久信(36)	"	"	"	"	089					6-057
194	"	近藤 裕史(33)	"	"	"	"	090					6-058
195	"	米谷 佳晃(32)	"	"	"	"	091					6-059
196	"	宗森 行生(32)	"	"	"	"	092					6-060
197	"	船原 尚武(30)	"	"	"	"	093					6-061
198	"	広瀬 顕(27)	"	"	"	"	094					6-062
199	"	児玉 裕介(23)	"	"	"	"	095					6-063
200	"	笹倉 俊一(21)	"	"	"	"	096					6-064
201	"	工藤 俊二(21)	"	"	"	"	097					6-065
202	5, 27	二上 純一(39)	C	チョモランマ	8848	貫田		074				8-051
203	9, 19	五味 秀一(36)	C	シシャバンマ	8027	長野県山岳協会	098					8-052
204	"	宮下 哲一(40)	"	"	"	"	099					8-053
205	10, 8	石坂 工(26)	N	マカルー	8463	ベルニナ山岳会					012	8-054
206	10, 10	長谷川恒男(43)	P	ウルタルII	7388	ウータンクラブ	100					7-087
207	"	星野 清隆(31)	"	"	"	"	101					7-088
208	10, 16	大西 宏(29)	C	ナムチャ・バルワ	7782	J A C	102					7-089
209	12, 28	太田 豪俊(48)	N	クスム・カングル	6369	単独					013	6-066
210	1992, 5, 23	星 学(29)	C	チョモランマ	8848	山学同志会		075				8-055
211	8, 20	八木沢和彦(21)	P	ヤズギル・ドーム南峰	7440	東京電機大学II		076				7-090
212	10, 2	二俣 勇司(37)	C	クラウン	7295	H A J	103					7-091

番号	遭難月日	遭難者氏名・年令	国	山名	標高	派遣母体名	雪崩	滑落	高病	行方	他	高度別
213	1993, 7, 11	小笹 徹(26)	P	サニ・ボククシュ	6885	東京志岳会	104					6-067
214	"	高橋 聡(28)	"	"	"	"	105					6-068
215	9, 30	佐々木祐一(43)	I	ニルカント	6596	帯広ビスタリC	106					6-069
216	"	小林 譲(45)	"	"	"	"	107					6-070
217	"	若林 善則(37)	"	"	"	"	108					6-071
218	"	高野 春夫(45)	"	"	"	"	109					6-072
219	"	増田 玄(25)	"	"	"	"	110					6-073
220	"	難波 毅(23)	"	"	"	"	111					6-074
221	10, 18	佐藤 正倫(29)	I	トゥインズ	7350	明治学院大学		077				7-092
222	1994, 8, 9	黒川溶三郎(32)	P	ウルタルII	7388	カトマンズC		078				7-093
223	9, 28	福沢 卓也(32)	C	ミニヤ・コンカ	7556	H A J	112					7-094
224	"	渡辺 靖之(27)	"	"	"	"	113					7-095
225	"	鈴木 洋介(27)	"	"	"	"	114					7-096
226	"	工藤 潤二(22)	"	"	"	"	115					7-097
227	11, 上	高嶋 石盛(47)	I	トゥインズ	7350	シッキム					014	7-098
228	"	築井 一徳(34)	"	"	"	"					015	7-099
229	1995, 8, 8	才藤 哲也(39)	C	チャクラギール	6772	福岡						016 6-075
230	10, 6	俵谷 久義(45)	N	ダウラギリ I	8167	"				007		8-056
231	1996, 5, 10	難波 康子(47)	N	サガルマータ	8848	公募隊						017 8-057
232	7, 22	山崎 彰人(28)	P	ウルタルII	7388	J A C・東海			015			7-100
233	10, 1	小西 政継(57)	N	マナスル	8163	登稜会						018 8-058
234	10, 6	大矢 宏(36)	C	チョー・オユー	8201	公募隊			016			8-059
235	10, 8	林田 正幹(63)	N	イムジャ・ツェ	6160				017			6-076
236	1997, 4, 26	石井 初男(35)	N	イムジャ・ツェ	6160							019 6-077
237	6, 16	横田川福造(47)	P	ブロード・ピーク	8051	静岡市山岳連盟	116					8-060
238	8, 20	広島 三朗(54)	P	スキル・ブルム	7360	神奈川ヒマラヤ	117					7-101
239	"	土森 譲(60)	"	"	"	"	118					7-102
240	"	菊田 佳子(37)	P	"	7360	"	119					7-103
241	"	永沢 茂(47)	"	"	"	"	120					7-104
242	"	中込清次郎(50)	"	"	"	"	121					7-105
243	"	原田 達也(62)	"	"	"	"	122					7-106
244	1998, 5, 6	椎名 厚史(27)	N	カンチェンジュンガ	8586	J A C				018		8-061
245	"	赤坂 謙三(30)	"	"	"	"				019		8-062
246	7, 26	大宮 秀樹(26)	P	ナンガ・バルバット	8126	太陽と風の会		079				8-063
247	7, 31	熊田 一徳(43)	P	ガッシャーブルム I	8068	郡山勤労者山岳					008	8-064
248	"	渡辺 孝(40)	"	"	"	"					009	8-065
249	"	橋谷田義文(31)	"	"	"	"					010	8-066
250	"	内藤 和俊(28)	"	"	"	"					011	8-067
251	8, 13	佐藤 広史(42)	S	レーニン	7134	仙台YMC A			020			7-107
252	1999, 8, 10	高橋 涉(46)	P	バトゥラ I	7785	福岡山の会	123					7-108
253	"	杉山 洋隆(43)	"	"	"	"	124					7-109
254	"	藤田 泰信(27)	"	"	"	"	125					7-110

(注) 外国人は除外した。

ヒマラヤ地域 日本人死亡者(原因別)

—トレッキングと標高6,000m未満の峰(交通事故は除いた)

番号	遭難月日	遭難者氏名・年齢	国	遭難場所	高度	高病	雪崩	滑落	不明	他	備考
01	1968, 8, 8	橋野 禎助(30)	P	コタルカシュ氷河					1		氷河探査に出発
02	"	剣持 博功(23)	"	"					2		"
03	1969,10,29	梶本徳次郎(48)	N	ニルギリ南尾根	4450	1					4850mまで到達
04	1971,11, 5	前田 光雄(56)	N	ランタン谷、キャンジュン	3800	2					
05	1973, 2,19	白石 勝教(40)	N	ナムチェ・バザール	3440	3					
06	10,	今泉 均(28)	N	ランタン谷、ティルマンの科尔	5670				3		ツェルトを発見
07	10,21	鈴木 幸造(23)	N	テシラブチャ峠	5755					1	疲労凍死(吹雪)
08	1974, 1, 1	浜田富久子(40)	N	タンボチェ	3875	4					
09	11,11	阿田 玲子(32)	N	エヴェレスト・ビューホテル	2827	5					ゴラクシェブまで
10	1976, 2, 2	大木 敬一(26)	N	ペリチェ	4252	6					
11	1978,	登山医学1	N	ペリチェ	4252	7					
12	1979, 3, 9	落合 昭(22)	N	トロン・パス	5416		1				
13	1980,	斉藤 久子(26)	N	ムスタン、ガサ						2	落石
14	8, 6	右田 卓(25)	P	ピラフォンド・ラ	5500			1			クレバス転落
15	12,20	松原喜久夫(26)	N	ペリチェ	4252	8					
16	12,27	高橋しづ子(49)	N	ナムチェ・バザール	3440	9					
17	1981, 6,10	白水ミツ子(30)	C	ボゴダ、C1付近	3850			2			クレバス転落
18	8,10	香椎 正純(21)	I	デュルン・デュルン氷河	5170			3			クレバス転落
19	11,21	小川 恵子()	N	ルクラ	2827	10					
20	1982, 4,上	上杉 論史(22)	N	カン・ラ	5322	11					
21	1983,10,20	中島 孚(72)	N	エヴェレスト街道	1305	12					消化管穿孔、KTM
22	1986, 5, 4	山縣 登(66)	C	シガツェ	3800	13					心不全
23	11,	鈴木 紀夫(38)	N	ダウラギリ山群	4200		2				イエティ捜索
24	1987, 8, 1	荒川 英明(30)	S	ベトロフスキー	4800					3	降下失敗
25	1989,11, 5	酒井 悟(49)	N	マツチャラム	4410	14					1981年脳卒中
26	"	暮林 聡(43)	"	"	4410	15					
27	1990, 5, 4	土屋 晃司(25)	S	エリブルース	5000				4		悪天停滞後行動
28	1993, 3,14	東大医学部学生	N	ジョルサレ	2804	16					
29	5, 1	対馬 審一(40)	C	四川省、大炮山	4700		2				大炮山は標高4900m
30	"	福田 栄一(43)	"	"	"		3				康定県木格措地区
31	"	春原 忠光(39)	"	"	"		4				雪崩は幅700m、長さ300m。
32	"	後藤 正明(38)	"	"	"		5				
33	"	小塚 明(34)	"	"	"		6				

番号	遭難月日	遭難者氏名・年令	国	遭難場所	高度	高病	雪崩	滑落	不明	他	備考
34	1993, 8, 13	早川 和子(55)	N	クムジュン	3790		4				足を踏み外し沢へ
35	1994, 2, 22	(63)	N	エヴェレスト街道		17					医師付きトレック
36	5, 2	山尾健太郎(27)	N	テント・ピーク			5				下山中滑落
37	8, 6	男性 (41)	N	エヴェレスト街道		18					
38	1995, 1, 2	松本 省二(54)	N	マツチェラム	4465	19					ゴーキョ目的
39	1995, 1, 4	男性 (50)	N	ターメ (富山隊)	3800	20					バルチャモ目的
40	3, 6	加藤 悦宏(60)	N	ブンキ	3250	21					
41	8, 31	谷口 竜二(29)	P	シプトン・スパイアー						5	単独、取付で発見
42	11.10	入沢 郁夫(67)	N	バンガ	4700		7				ゴーキョ・ピーク
43	"	田辺 史(65)	"	"	"		8				登頂後、異常降雪
44	"	大石 光和(47)	"	"	"		9				による雪崩。
45	"	波多野英男(57)	"	"	"		10				
46	"	梶原 達男(52)	"	"	"		11				
47	"	小森 敬司(51)	"	"	"		12				
48	"	村山 伊吉(58)	"	"	"		13				
49	"	大木 馨(57)	"	"	"		14				
50	"	水野 晴之(57)	"	"	"		15				
51	"	石井恵美子(57)	"	"	"		16				
52	"	兼子 俊一(65)	"	"	"		17				
53	"	山田 栄一(66)	"	"	"		18				
54	"	中村 隆之(38)	"	"	"		19				
55	11, 10	藤原 功(60)	N	パンベマ	5000		20				カンチェンジュン
56	"	河田 祥志(60)	"	"	"		21				ガ、トレック
57	11, 13	滝本 啓一(69)	"	"	"		22				救助後、衰弱死
58	1996, 8, 12	高橋 基子(61)	P	ブナール(ナンガ・バルバット)	1300	22					熱中症
59	1997, 6, 26	松岡 清司(25)	P	レディース・フィンガー	C1下		23				荷上げし下降中
60	1998, 2, 2	鍋島 哲(61)	N	ディンボチェ	4200	23					チュクン(4000m)まで
61	1999, 7, 27	男性	P	バトゥラ氷河〜ユンザにて死亡	2998	24					タンカで下山中

※国の略：N=ネパール P=パキスタン C=中国 S=旧ソ連 I=インド

(山森欣一 作成)

*この他に94年7月クーンブから帰りカトマンズで病死(女・59)。95年10月チベットから帰りカトマンズで病死(男・61)など、高山病の影響と考えられるケースも増えつつある。

■ 寸 感 ■

今春のエヴェレストも天候に恵れたらしく、中旬に相次いで登頂成功となった。ご同慶の至りである。しかし、19日最高齢登頂報道の各紙の取り扱いの違いには驚かされた。一面にカラー写真で取り上げられたかと思うと全くのベタ記事もある。スポーツ紙は家族にも取材して半ページ使った所があるかと思うとベタもある。いかに登山の評価が一定していないかの証なのであろうか。

突如「海の118番」が、国主導で宣伝され始めた。「山」はどうなっているのか。これまでも当事者である我々は黙ってきた。しかし、ここまでくれば「山」も一致団結しなければならない。(山)

事務局日誌 (5月)

- 9日(火) ヒマラヤ343号発送
12日(金) 労山主催、シュールベルト夫妻歓迎会
(日本青年館、酒井、山森)
13日(土) 労山創立40周年祝賀会(日本青年館、
遠藤、酒井、山森、八木原、尾形)

- 18日(木) 平成12年度会員名簿納入
27日(土) HAJ理事会(於、HAJルーム
8名)
HAJ通常会員総会(かんぽヘルス
プラザ東京20名)
28日(日) 日山協創立40周年祝賀会(明治記念
館、遠藤、酒井、山森)
29日(月) 東京集会(17)名

ヒマラヤ No.344 (7月号)

平成12年6月10日印刷 12年7月1日発行
発行人 山森欣一
編集人 山森欣一
発行所 日本ヒマラヤ協会
〒170-0013 東京都豊島区東池袋4-2-7
萬栄ビル501号
電話 03-3988-8474
郵便振替 00100-6-48954「日本ヒマラヤ協会」



ガモフバッグとパルスオキシメーターのレンタル開始!

加圧しただけで約2000m下山したのと同じ環境を作るガモフバッグ、高山病診断、予防のためのパルスオキシメーター。高所を目指すあなたをそろって力強くサポートします。

- ガモフバッグ(携帯用高压バッグ/総重量6.7kg)
- パルスオキシメーター
(血中酸素飽和度測定装置/重量380g/単3乾電池4本使用/携帯型)

総代理店 : 日本メディコ株式会社

レンタル・販売問い合わせ先 : 株式会社 ティ・エッチ・アイ

〒135 東京都江東区木場2-5-7 KHビル7階
TEL : 03-5245-0511 FAX : 03-5245-0510
(隊荷の輸送、航空券の手配などもお任せください。)

TREASURE TOUR



EXPEDITION & TREKKING

自分の旅だから、自分でつくる。そんなあなたを応援いたします。

—— 遠征隊、トレッキング、秘境への旅 ——

あらゆる申請・許可取得、現地手配、航空券、山岳保険など、
お客様のご要望に遠征経験豊富なスタッフがご答えします。

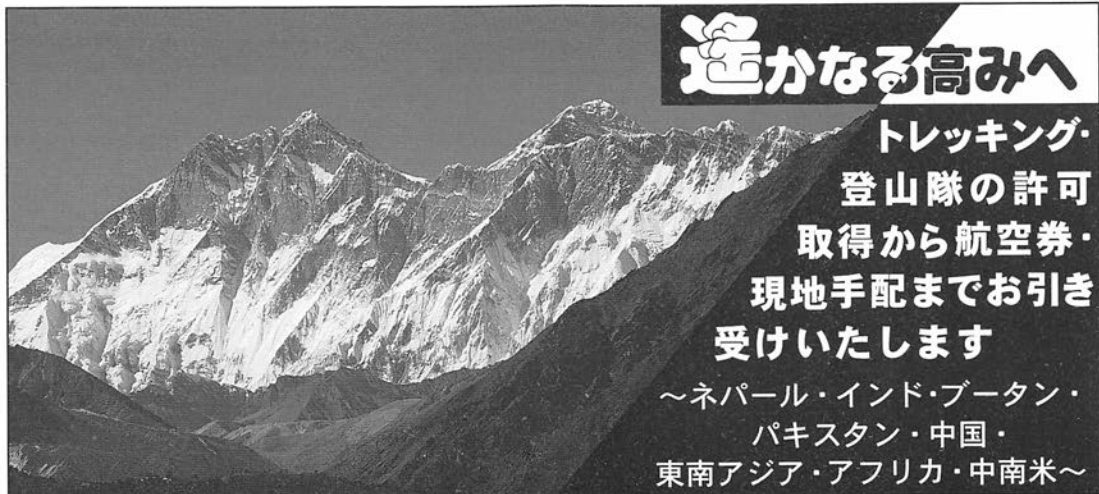


マウンテントラベル株式会社

〒105 東京都港区新橋3-26-3 会計ビル4F

☎03-3574-8880

三井航空サービス代理店2452号



遙かなる高みへ

トレッキング・
登山隊の許可
取得から航空券・
現地手配までお引き
受けいたします

～ネパール・インド・ブータン・
パキスタン・中国・
東南アジア・アフリカ・中南米～

トレッキング・海外登山・シルクロード・
秘境旅行のパイオニア



株式会社 西遊旅行

運輸大臣登録旅行業第607号・日本旅行業協会正会員

■本社 〒101-0051 東京都千代田区神田神保町2-3-1
岩波書店アネックス5階
☎03(3237)1391代 FAX 03(3237)1396
■大阪営業所 〒530-0026 大阪市北区神山町6-4 北川ビル5階
☎06(6367)1391代 FAX 06(6367)1966
■カトマンズ連絡事務所 (JAI HIMAL TREKKING / SAIYU TRAVEL)
P.O. BOX 3017, Durbar Marg, KATHMANDU, NEPAL
☎221707, 224248

●格安航空券はこちらに!



キャラバンデスク

キャラバンデスク東京(住所:本社内) ☎03(3237)8384代 FAX 03(3237)0638
キャラバンデスク大阪(住所:大阪営業所内) ☎06(6362)6060代 FAX 06(6367)1966

◆パンフレット請求や個人旅行のお申し込みは
フリーダイヤル をご利用下さい
(通話料無料)

☎0120-811395

西遊旅行ホームページ (<http://www.saiyu.co.jp/>)

ヒマラヤへの装備

●遠征隊の装備、相談にのります。



Mt. EXPEDITION SHOP ICI ISHII SPORTS

- 登山本店/〒169 東京都新宿区百人町2-2-3 ☎03(3208)6601代
- スキー&カヌー本店/〒169 東京都新宿区大久保2-18-10 ☎03(3209)5547代
- 新宿西口店/〒160 東京都新宿区西新宿1-16-7 ☎03(3346)0301代
- 新宿南口店/〒151 東京都渋谷区代々木1-58-4 ☎03(5350)0561
- 神田登山店/〒101 東京都千代田区神田神保町1-8 ☎03(3295)0622
- 神田店/〒101 東京都千代田区神田神保町1-4 ☎03(3295)3215
- 神田ウェア館/〒101 東京都千代田区神田神保町1-6-1 ☎03(3295)6060
- 八王子店/〒192 東京都八王子市横山町3-12 ☎0426(46)5211
- アネックス八王子店/〒192 東京都八王子市横山町3-6 ☎0426(46)3922
- 川越店/〒350 埼玉県川越市南通町14番4 ☎0492(26)6751
- 大宮店/〒330 埼玉県大宮市宮町2-123 ☎048(641)5707
- 高崎店/〒370 群馬県高崎市新町5-3 ☎0273(27)2397
- 松本店/〒390 長野県松本市中央2-4-3 ☎0263(36)3039
- 新潟店/〒950 新潟県新潟市東大通2-5-1 ☎025(243)6330

- 新潟ブライカ店/〒950 新潟県新潟市天神1-1 ブライカ3 B1 ☎025(240)2316
- 仙台店/〒980 宮城県仙台市宮城野区榴岡4-1-8 ☎022(297)2442
- 盛岡大通店/〒020 岩手県盛岡市大通1-10-16 ☎0196(26)2122
- 札幌店/〒060 札幌市中央区南二条西4-8 ☎011(222)3535
- ルート36真栄店/〒004 札幌市豊平区真栄一条2-13-2 ☎011(883)4477
- 北十二条店/〒001 札幌市北区北十二条西3-5 ☎011(747)3062
- 2番街店/〒060 札幌市中央区南二条西1-5 ☎011(219)1413
- 旭川店/〒070 旭川市六条通8-37-2 ☎0166(24)5300
- 外高部(メールオーダー)/〒169 東京都新宿区百人町2-2-3 ☎03(3200)7219



ICI 石井スポーツ

事務所/〒169 東京都新宿区百人町1-4-15 ☎03-3200-1004